25 June 2026

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 25

“Will”から“Shall”へ

金山　亮太

リンダ・コリーの『イギリス国民の誕生（*Britons: Forging the Nation 1707~1837*）』を読んだ時に気づいたのは、原著タイトルの *Britons* という名称から想起される愛国歌「ブリタニアよ、統治せよ！（“Rule, Britannia!”）」には言及が数回しかないことだった。ジェイムズ・トムソンの仮面劇『アルフレッド（*Alfred; a masque*）』（1740）の最後に登場するこの曲は、今日でも各種の国家的イベントだけでなく BBC プロムスの最終日で演奏されることで有名である。ロイヤル・アルバート・ホールの聴衆だけでなく、同時間帯にイギリスの各地で群集が声を揃えてこの歌を唱和し、英国や英国の友好国の国旗を翻して熱烈な愛国心を発露する姿がテレビで生中継される。YouTube でこの歌を何種類か聞くことができるが、各スタンザ末尾の語句が元の歌詞と異なっていることがある。因みにこの歌の歌詞の一番は、日本版 Wikipedia では以下のように紹介されている。

When Britain first at Heav’n’s command
Arose from out the azure main;
This was the charter of the land,
And guardian angels sang this strain;
Rule, Britannia! Britannia, rule the waves:
Britons never never never shall[will] be slaves.

ここで注目したいのは、最終行の助動詞が shall[will]と表記されていることである。トムソンの原作では“Britons never will be slaves.”となっており、IMSLP（The International Music Score Library Project）のホームページに掲載されているオリジナルの楽譜でも will が使われているが、最近では“Britons never shall be slaves.”と歌われることもあるようなのだ。昨今はこの種の助動詞の用法を学校文法では詳しく教えないようだが、ご承知のとおり、一人称以外を主語とする場合、shall には「話し手の意志」が込められる。“You shall not have it.” 「お前にはあげないよ」とか、“When shall he come here?” 「いつ彼をここに来させましょうか」などの例文からうかがえるのは、「あなた」や「彼」の事情にはお構いなく、こちらの都合で物事を決めるぞという意志である。だとすれば、本来は「ブリトン人は決して奴隷にはならないぞ」という断定であったはずの原作が、「ブリトン人を決して奴隷にはさせないぞ」という第三者からの宣言に書き換えられていることになる。

ここで筆者の頭に浮かんだのは、ヴィクトリア朝以降の「愛国的」な歌の中にはこの種の shall、すなわち絶対的な権威によって大英帝国の繁栄が末永く保証されているかのような信念を流布しようとする表現が発見できるのではないか、という仮説である。愛国的な歌でまず想起されるのはエドワード・エルガー作曲の「希望と栄光の国（“The Land of Hope and Glory”）」（1902）であろう。

「威風堂々（“Pomp and Circumstances”）」というタイトルで知られることも多いこの曲は、もともと作家 A. C.ベンソンがエドワード 7 世の戴冠式のために作詞した「戴冠式頌歌（“Coronation Ode”）」の最終節として書かれた。元の歌詞からは一部変わっているが、愛国的な語句が含まれるのは当然のことである。

Land of Hope and Glory, Mother of the Free,
How shall we extol thee, who are born of thee?
Wider still and wider shall thy bounds be set;
God, who made thee mighty, make thee mightier yet,
God, who made thee mighty, make thee mightier yet.

ここに登場する二つ目の shall は、主語が三人称であることから、帝国の版図拡大を肯定するもの（God）の意志が背後にあることが示唆される。第 2 次ボーア戦争（1899~1902）の記憶も新しい時期に発表された、露骨な植民地主義的欲望を含む歌詞からは、帝国主義の絶頂期の繁栄を謳歌していた人々が共有していたであろう高揚感が見て取れる。ラドヤード・キプリングの詩「白人の責務（“The White Man’s Burden”）」(1899)に見られたような西洋文明優越の発想が、shall を含む他の愛国詩から見つかってもおかしくはない。

W. E. ヘンリーの愛国詩「われらの王のために（“Pro Rege Nostro”）」（1892）は詩集 *For England’s Sake*（1900）に収録された作品であるが、その特徴的なリフレインから “England, my England” というタイトルでも知られている。その第二連は以下の通り。

Where shall the watchful sun,
England, my England,
Match the master-work you’ve done,
England, my own?
When shall he rejoice agen
Such a breed of mighty men
As come forward, one to ten,
To the Song on your bugles blown,
England—
Down the years on your bugles blown?

かつての大英帝国の誇りを取り戻そうとする Brexit、そしてその反動としての Bregret（性急に EU を脱退したことへの後悔）などの混乱もあり、今日の英国国民にはこの詩は時代がかった過去の遺物のように見えることだろう。「偉大な英国」、「強い英国」という肥大した自画像を太陽に見せつけようとするこの一節は、彼らの「黒歴史」の一部になっているようである。

このように現代では shall の持つ「神通力」が失われたかに見えるが、神頼みが通じない絶望的な状況に陥った時、人々が立ち返ったのは『アルフレッド』の原文にある will、すなわち自らの手で国を守ろうとする精神だった。Brexit のちょうど百年前、第一次世界大戦中の 1916 年に讃美歌「エルサレム（“Jerusalem”）」が誕生する。もともとはウィリアム・ブレイクの長編詩『ミルトン（*Milton*）』（1804~10）の序文の一節で、古代のブリテン島にキリストがアリマタヤのヨゼフと共に訪れたという伝説に基づいている。全四連の最後の二連が愛国心を鼓舞する表現として読めることに注目したい。

Bring me my bow of burning gold
Bring me my arrows of desire
Bring me my spear, O clouds unfold!
Bring me my chariot of fire.

I will not cease from mental fight

Nor shall my sword sleep in my hand
Till we have built Jerusalem
In England's green and pleasant land.

当初は半年もすれば終結すると思われていた戦闘が泥沼化し、英国兵士だけに限っても 90 万人以上が命を落としたこの戦争のさなか、なおも国の名誉を守ろうとする人々は「戦いをやめない」、「剣を眠らせまい」と歌う。彼らは、かつてキリストが歩いたという祖国（その頃にはイングランドという国は存在しないのだが）を「神に祝福された土地」として守るという使命感を帯びて戦う「聖戦の勇士」として美化されていく。しかし、このイングランドは誰のための「祖国」だったのか。

「生粋のイングランド人（"The True-born Englishman"）」（1701）でダニエル・デフォーが指摘したように、古来よりブリテン島では様々な人種が往来し、原住民との混血が繰り返された結果、今や生粋のイングランド人などいないのであった。フランスをライバル視していた頃の英国にとって、「ブリトン人」という新たな民族的アイデンティティは国民統合のための重要な「記号」だった。19 世紀に入り大英帝国の繁栄が確固たるものになると、ブリティッシュネスという旗の下に統合されていた国民の間にひずみが生じ始める。アングロ・サクソン対ケルトという人種の差異が強調されるようになり、いつしかブリティッシュネスはイングリッシュネスの下位概念になっていった。ここから連合王国への帰属意識の格差が国民の間に生じることになる。

サヴォイ・オペラの人気作『軍艦ピナフォア号（*H. M. S. Pinafore*）』（1878）の中で主人公レイフ・ラックストローは当初 "a British soldier" と自称していたが、コーコラン艦長の娘ジョゼフィーンに求愛するときには "I am an Englishman!" と宣言してみせる。連合王国の一員である以上にイングリッシュとしての出自が重要であると言わんばかりのこのセリフが暴くのは、ベンジャミン・ディズレイリが『シビル（*Sybil*）』(1845)の中で「英国には二つの国民がいる」と喝破した階級間格差ではない。ブリティッシュネスという「お仕着せ」のアイデンティティとは別に、英国国民は各自の民族性をも抱きしめ続けている。彼らの抱くイングリッシュネス、スコッティッシュネス、アイリッシュネス、ウェルシュネスは、時として神以上に彼らをブリテン島に引き留める錨の役割を果たしているのかもしれない。「ブリタニアよ、統治せよ！」を will で歌い、あるいは shall で歌うとき、彼らは連合王国と自らの民族性への帰属意識のはざまで揺らいでいるのである。

「在」と「不在」の戯れ
―ヴィクトリア朝の視覚表象と言語表象のはざまで

加藤　千晶

2017 年発行の『ヴィクトリア朝文化研究』第 15 号に、D. G. ロセッティの代表作のひとつ《レイディ・リリス》（*Lady Lilith*）の水彩レプリカを日本で（再）発見したこと、来歴を解明し、その後作品がサザビーズの競売で売却されたことの顛末を語ったエッセイを掲載していただいた。そのとき、インターネット上で公開されている *The Rossetti Archive* にいずれ詳細が載るであろうと記したが、アーカイヴは未だ更新されていない。二つ存在するとされる水彩画のレプリカは、油彩画の《レイディ・リリス》のモデルの顔が描き変えられる前の面影を残すために重要なのだが、メトロポリタン美術館所蔵の水彩画は、ロセッティの助手のトレフリー・ダンの手が加えられているために、質が劣るとみなされている。フェミニズムの視点からロセッティの女性像を論じたグリセルダ・ポロック（1988）は、この絵の原型を説明するのにメトロポリタンの水彩を拠り所にしていたし、その延長線上で、K. A.プソミアデス（1997）は、批評家たちがもはやどこにも存在しない想像上の「オリジナルな」絵を仮定し、質の悪い水彩のコピーの方に油彩画に勝る優位性を認めさえしていると述べた。（再）発見した水彩とその裏に貼られた絵のための詩の直筆草稿の重要性をまとめた論文は、2018 年にラファエル前派研究の学術誌 *The Journal of Pre-Raphaelite Studies*（以下 *JPRS*）

に掲載され、その概要は *Victorian Poetry*（vol. 57, no. 3, 2019）の年間報告にも記載されたのだが（但し結論に筆者の意図しない引用の誤りが在り）、その後年月が経ち、この水彩画の存在は朧げになりつつある。絵は再び個人蔵となり、その後一般に公開されたという情報もない。かつて作品の来歴を追跡する過程で、度々貴重な助言や励ましをいただいた *The Rossetti Archive* の管理・編集者のジェローム・マッギャンは、当時、私が送った画像や資料とともにアーカイヴを更新しようとしていたが、スタッフの不足などで難航しているようだった。先日、*JPRS* の編集者デイヴィッド・レイサムに尋ねてみると、ヴァージニア大学をオンライン上のヴィクトリア朝研究の中心地にしようとするマッギャンの大規模な計画に対して、数年前大学からの資金提供の打切りがあり、NINES（Networked Infrastructure for Nineteenth-Century Electronic Scholarship）プロジェクトも閉鎖されたとのこと（一部の検索機能はまだ有効なようだが）。ヴィクトリア朝に関する近年の有益なインターネット上の学術的リソースとしては、19 世紀末の雑誌をその歴史的文脈の資料とともにアクセス可能にした *Yellow Nineties 2.0*（2024 年の *JPRS* 春号で特集が組まれている）があるし、*JPRS* の過去の号をすべてデジタル化してオンライン上で無償公開する計画も進行中だが、いずれも資金面での懸念を抱えているらしい。人文学の知を支える経済的基盤が潤沢といえないことは、何処も同様であろうかと少々侘しくなるが、*The Rossetti Archive* の更新については、自分で修正版を作ってマッギャンに再度依頼したらどうかと提案され、大分高齢になられたはずだがお元気な様子にひとまず安堵した。

リリスは再び雲隠れしてしまったが（但しサザビーズの HP でその麗しい姿を見ることはできる https://www.sothebys.com/en/auctions/ecatalogue/2017/victorian-pre-raphaelite-british-impressionist-art-l17132/lot.7.html）、「美」の「在」・「不在」をめぐる問題については、近年興味深い考察が発表されている。

古代より伝わる伝説の魔女に着想を得た《レイディ・リリス》の絵（由来の詳細については前述のエッセイを参照）には、「肉体の美（Body's Beauty）」という詩（ソネット集「生の家」[The House of Life] 78 番）が対になっているが、このファム・ファタール的な怪しい美を詠う一対の絵と詩に対して、《シビラ・パルミフェラ》（*Sibylla Palmifera*——棕櫚の葉をもつ巫女の意）と「魂の美（Soul's Beauty）」（同 77 番）という対極の概念を主題とする一対の絵と詩がある。ロセッティ自身による同主題の詩と絵画の一対の創作物は、ロセッティ研究者の間では、エインズワースに倣って"double work of art"と呼ばれるが、2023 年のニコラス・ダン＝マカフィーによる論文"'I drew it in as simply as my breath': absence, presence, and ideal beauty in Dante Gabriel Rossetti's *Sibylla Palmifera* (1866–70) 'double work of art'"は、この「二重の芸術作品」の関係に刺戟的な解釈を提示するものである。ダン＝マカフィーは 2025 年にヨーク大学でエリザベス・プレットジョンの指導のもとに博士号を取得した気鋭の研究者で、2023 年にテイト・ブリテンで開かれた展覧会"The Rossettis"の開催中に開かれた学会（"Rossettis: In Relation"）では"Close Reading"と題されたパネルで司会を務めていた（筆者は展覧会にも学会にも残念ながら足を運んでいないが、学会の発表等の様子をウェブ上で観ることができるのは有難い https://www.paul-mellon-centre.ac.uk/whats-on/rossettis-in-relation）。「精読」という題目のパネルで絵画・詩の相互関係を精緻にかつ多角的に論じた三つの発表を纏めていたダン＝マカフィーは、上記の論文では、W. J. T. ミッチェルの"image / text"の理論を援用しつつ、絵画と文学テクスト間の亀裂や差異を綿密に検証してゆく。「鑑賞者－読者（viewer-reader）」の作品受容体験をなぞるように、異なる媒体間の間隙を緻密に暴くプロセスには、ディコンストラクションや読者（鑑賞者？）反応批評の響きが微かにあるようにも感じられるが、記号論に依拠したかつての一連の批評の流れのように、作品の統合性を最終的に崩すような方向には向かわず、二重の作品にも、それらにおける差異に気づく読者・鑑賞者の体験にも、なんらかの統一した審美的な意味を見出そうとする方向性が感じられたことに安堵した。先に述べた学会のパネルの発表者たちについても同様である（私の個人的な希求のたんなる投影でなければよいと願う）。

詩は時間性を帯びて想像力に訴えるもの、絵は一瞬を空間に凝縮させるものとして、両者の間に明確な境界線を据えたレッシングに対して、A. W. ヘファーナンは「視覚表象の言語表象」としての「エクフラーシス」を提唱して、異なる媒体間の断絶を解消しようとしたが、ダン＝マカフィーはあえて「相互排他性」という読み方（見方）をしてヘファーナンを超えようとする。

主題となっているシビラは、流れる髪と瞑想的な顔で観る者を巻き込んで破滅させるリリスとは

対照的に、玉座に座る威厳ある眼差しの美の女神である。拙訳にて詩を紹介する。

「生」の住まう円蓋(アーチ)のもと、愛と死、恐れと神秘に護られた社(やしろ)で、
　　僕は見た　玉座につく「美」を。
　　その眼差しに畏れをかきたてられたが
呼吸(いき)をするよう、たやすく視線を吸い込んだ。
「美」の眼(まなこ)は、頭上の天、下方の海が
　　おまえに注ぐような、そんな目。海、天空(そら)、女を介して
　　ひとつの掟へと引き寄せてゆく、
彼女の携える棕櫚の葉と花綱の、虜となるべく定められた者を。

ここに坐(いま)すはかの「美」の女神、その美を讃えようと
　　おまえの声と手はひそかに震える――長いこと知っていたのだ
　　翻る髪、はためく裾を垣間見て――おまえの鼓動と足音が
　　日毎、女神を追い求めた間も。
　　なんと烈しく、取り戻しようもなく
幾多の術(すべ)と歳月(とき)を費やし、如何にたわいもなく飛び廻ったことか！

（『ペイター論集』第 7 号、2019 年より転載）

詩の原文は、以下のウェブサイトを参照されたい。
https://rossettiarchive.iath.virginia.edu/docs/1-1867.s193.raw.html

Dante Gabriel Rossetti, *Sibylla Palmifera*, 1866-70.
Oil paint on canvas. 97.7 × 85.4 cm. Lady Lever Art Gallery, Port Sunlight.
Courtesy National Museums Liverpool, Lady Lever Art Gallery.

詩は一見、絵画の説明をしているようだが、宇宙の原理とつながるような「理想美」の姿、音や感触を伴って仄めかされるとらえどころのなさは、言語によってこそ伝わることは明らかだろう。

当論文は、詩には顕著だが絵には欠落している要素、またその逆の場合について、一見して気づかないような部分まで綿密に拾い、「見せられていないものを語り、語られていないものを見せる」二重作品において、「在」と「不在」が相互作用する仕組みを提示した。捉えがたい理想美の追求というテーマの詩であるからこそ、「在」「不在」の問題もより明確に前景化されたといえるだろう。画家詩人にとっての「在」と「不在」の感覚を視覚表象と言語表象の相互干渉のあわいに探る試みは極めて魅惑的である。同時に、ロセッティにとって、形をもつものと持たないもの、隠れるものと現れるもの、知覚できるものとできないものをめぐる問題は、異なる芸術媒体の干渉／不干渉以上のなにごとか――既知と未知がせめぎあうヴィクトリア朝という時代の風土の中での彼自身の存在のゆらぎ、不可知論的な世界観と深く関わっているようにも思えてならない。

《レイディ・リリス》は、いつの日かまた戯れに、我々の眼前に現れてくれるだろうか。

参考文献

Ainsworth, Maryan Wynn, ed. *Dante Gabriel Rossetti and the Double Work of Art*. Yale U Art Gallery, 1976.

Dunn-McAfee, Nicholas. "'I drew it in as simply as my breath': absence, presence, and ideal beauty in Dante Gabriel Rossetti's Sibylla Palmifera (1866–70) 'double work of art'" *English: Journal of the English Association*, vol. 72, 2023, pp. 201-214. https://doi.org/10.1093/english/efad026 [accessed 11 May 2026].

Heffernan, James A. W. *Museum of Words: The Poetics of Ekphrasis from Homer to Ashbury*. U of Chicago P, 1993.

Kato, Chiaki. "(Re)Discovering Rossetti's Lady Lilith: The Stevenson Watercolour, Manuscript Sonnet, and Unpublished Letters." *Journal of Pre-Raphaelite Studies*, vol. 27, spring, 2018, pp. 42-57.

Mitchell, W.J.T. *Picture Theory*. U of Chicago P, 1994.

Pollock, Griselda. *Vision and Difference: Femininity, Feminism, and History of Art*. Routledge, 1988.

Psomiades, Kathy Alexis. *Body's Beauty: Femininity and Representation in British Aestheticism*. Stanford UP, 1997.

加藤千晶「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ訳詩―「魂の美」（ソネット集「生の家」第 77 番）」（翻訳と解題）『ペイター論集』第 7 号、日本ペイター協会、 2019 年、59-63 頁。

--- 「リリスの軌跡を辿って――D・G・ロセッティ《レイディ・リリス》再発見からサザビーズのオークションまで――」 『ヴィクトリア朝文化研究』第 15 号、2017 年、181-195 頁。

松村伸一「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのエクフラーシス詩と世紀末美学の形成」『青山学院女子短期大学紀要』第 56 輯、2002 年、57-81 頁。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2025 年度総会

日時：2025 年 11 月 8 日（土）17 時 10 分～17 時 50 分
場所：名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり翼館 302（司会　石川大智事務局長）
議題
【報告事項】

1. 2025 年度活動報告・活動予定
   I. 委員会、役員会関係
   運営委員会・理事会・総会
   2025 年 9～10 月　臨時運営委員会（メール審議）

2025 年 11 月 6 日　第 1 回運営委員会・理事会（Zoom 開催）
2025 年 12 月 27 日　臨時総会（Zoom 開催）
2026 年 3 月 28 日　第 2 回運営委員会（Zoom 開催）
学会誌編集委員会
2025 年 6〜9 月　第 1 回編集委員会（メール審議）
大会企画・準備委員会
2025 年 7 月 28 日〜8 月 4 日　第 1 回大会企画・準備委員会（メール審議）
2025 年 8 月 23 日〜9 月 1 日　臨時大会企画・準備委員会（メール審議）
2026 年 3 月 4 日　第 2 回大会企画・準備委員会（Zoom 開催）
II.　学会誌、ニューズレター
2025 年 5 月 1 日　*The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 24 発行
2025 年 11 月 20 日　『ヴィクトリア朝文化研究』第 23 号発行
III.　全国大会関係
2025 年 11 月 8 日　第 25 回全国大会（対面、名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり）

2. Newsletter について
上記の通り、発行された旨報告があった。
3. 学会誌について
上記の通り、発行される旨報告があった。
4. その他
「2025 年度会費納入のお願い」の案内があった（本案内は学会誌の最新号にも同封）。

【審議事項】
1. 2024 年度決算
資料に基づき報告され、一部補足説明の上、了承された。
2. 2025 年度予算案
資料に基づき報告され、一部補足説明の上、了承された。
3. 2026 年度大会開催について
資料に基づき報告され、了承された。
4. その他
次期編集委員長の人事に関しては、会場の意見を踏まえて継続審議となった。総会での了解事項に基づき、その後 12 月 27 日に Zoom 開催された臨時総会にて再審議の上、新案が承認された。

＊本報告は総会後の活動状況を反映した最新版です。

2024 年度決算報告書（2024.4.1-2025.3.31）

単位：円

【収入の部】

項　目	金　額	備　　考
前年度繰越金	7,036,708	
利子	138	ゆうちょ銀行（総合口座）より
出展料	0	
学会費	1,756,000	
学会誌販売	0	
合　計	8,792,846	

【支出の部】

項　目	金　額	備　　考
通信費	103,358 （うち次年度精算分 52,762）	郵送費（振込表、書評図書） 長３封筒、サーバーレンタル代等
大会経費	87,481 （うち次年度精算分 8,721）	ポスター代（ポスター郵送代） 教室使用料等
懇親会費	163,350	株式会社ゴーン
学会誌印刷費	567,884	大日本法令印刷株式会社
学会誌図書費	81,059 （うち次年度精算分 63,195）	書評図書
振込手数料	1,320	1 件につき 165 円
消耗品費	100	デザイン包装袋
役員会費	0	
役員交通費	0	
大会講演・シンポジウム謝礼（非会員）	30,000	非会員大会講演 1 名
学生会員奨励金	10,000	大会発表学生会員 1 名
アルバイト謝礼	20,000	アルバイト 2 名
学会誌執筆謝礼	0	執筆者がご厚意で受け取りを辞退
事務局員謝礼	209,340 （うち次年度精算分 119,670）	月 10,000 円×2 名
雑費	0	
会費過入金返金	0	
その他（大会経費未使用分）	30,000	
合　計	**1,303,892** **（うち今年度精算分 1,059,544** **次年度精算分 244,348）**	

	次年度繰越金	現在高	備考
ゆうちょ銀行（総合）	921,889	921,889	
ゆうちょ銀行（振替）	6,567,065	6,811,413	次年度積算分 244,348 未精算
合計	**7,488,954**	**7,733,302**	

以上の通りご報告いたします。

2025 年 11 月 8 日　　会計　　石川　大智

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2025 年 11 月 8 日　　会計監査　矢次　綾

以上の報告内容は最新版です。本来 2024 年度中に精算予定だった支出の一部について、年度末処理の都合上、次年度に精算を行ないました。発生日が 2024 年度内のため、2024 年度決算に計上しています。

2025 年度予算案（2025.4.1-2026.3.31）

単位：円

【収入の部】

項　目	2025 年度
前年度繰越金	7,488,954
受取利子	462
出展料	0
学会費	1,750,000
学会誌販売	0
合　計	**9,239,416**

【支出の部】

項　目	2025 年度
通信費	100,000
大会経費	90,000
懇親会費	0
学会誌印刷費	600,000
学会誌図書費	100,000
振込手数料	1,500
消耗品費	1,000
役員会費	0
役員交通費	0
大会講演・シンポジウム謝礼（非会員）	30,000
学生会員奨励金	20,000
アルバイト謝礼	40,000
学会誌執筆謝礼	30,000
事務局員謝礼	240,000
雑費	0
会費過入金返金	0
その他（大会経費未使用分、次年度に返金済）	0
合　計	**1,252,500**

次年度繰越金	**7,986,916**

合　計	**9,239,416**

第 26 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 26 回大会は、2026 年 11 月 21 日（土）に中央大学茗荷谷キャンパスで対面形式にて開催予定です。

「男たちの秘密結社・クラブから見たヴィクトリア朝文学」（仮題）というシンポジウムを予定しております。司会・報告を榎本洋氏（元愛知県立大学教授）、報告を亀井伸治氏（中央大学教授）、加賀山卓郎氏（英米文学翻訳家）にお願いしております。

特別講演は、山口惠里子先生（筑波大学教授）にご司会いただき、三菱一号館美術館 館長の池田祐子先生にお話しいただくことになっております。（なお、大会翌日に三菱一号館美術館へのエクス

カーションを予定しております。）

第 26 回大会で研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、**発表要旨（400 字）と略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）および主要業績を記した WORD ファイル**を、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。

締め切りは 2026 年 7 月 10 日（金）必着です。

本学会は学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10,000 円を支給いたします。（ただし、この補助を受けた会員は大会後最低 2 年間、会員として在籍しなくてはなりません。）詳細は、事務局までお問合せください。

＊懇親会、その他大会の詳細につきましては、今後適宜学会メーリングリストにてご連絡をさしあげる予定です。

第 27 回全国大会ラウンドテーブルの企画募集

2027 年 11 月に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 27 回全国大会（開催場所と日時は 8 月以降に決定される予定です）における、ラウンドテーブルの企画を募集いたします。2 時間 30 分程度（15 分の休憩を含む）の時間枠を予定しております。

締め切りは 2026 年 10 月末日必着といたします。

ラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2027 年 3 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

[1] 応募締め切り：2026 年 10 月末日必着

[2] 申請方法：下記の申請必要記載事項を記入した WORD ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。

[3] 申請必要記載事項

1. ラウンドテーブルのタイトル
2. 趣旨（400 字程度）
3. 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
4. プログラム：1）司会者（氏名、所属）2）報告者（氏名、所属）3）各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）4）タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください。）

＊ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、学会規程にもとづき謝金等をお支払いいたします。

[4] 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室（英語）石川大智研究室内
TEL：045-566-1133
E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com

編集後記

第 25 号には、会員の金山先生と加藤先生が、ご多忙ななか玉稿をお寄せくださいました。この場をお借りして、両先生と、ニューズレター作成にご協力いただいた諸先生方に、深謝申し上げます。（NL 担当　若名咲香）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室（英語）
石川大智研究室内
TEL：045-566-1133
E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com
発行日：2026 年 6 月 25 日